5. EWSを用いた気管支鏡検査が示唆した Streptococcus anginosus group による有菌性胸膿の2例

佐久川亮

豊田容裕、齋藤也和、河口俊美、深松伸明、小川尚広、森近大樹、細川晃、内村正志、別所昭宏、渡辺洋一（岡山赤十字病院呼吸内科）

【目的】有膿性胸膿に対しては胸腔内剤の内視・外視閉鎖・閉鎖閉鎖を目的とした開胸術、大気管充実術などの外科的治療がしばしば施行されるが基礎疾患分類別、全身状態不良例が多く、治療に難渋することも多い。EWS充気により保存的に加療を待った2例を経験したので報告する。【症例】80歳男性。多覚網状化治療前、気管内挿通の不願性空気を長期間繰り返した後、胸腺前部の扁平性胸膿（左側）を発症。抗酸剤全身投与、胸腔ドレナージ施行し第16日目に左側区にEWSを充気、肺の完全拡張および気道の完全漏満を果たした。現在も胸膿の再発なし。【症例】27歳男性。発熱、呼吸困難にて救急外来受診、左有膿性胸腔と診断し胸腔ドレナージ、抗酸剤全身投与開始。側からの空気膿と見られる左肺腫大の過剰充気に対する応答としてEWS充気を施行したが、EWS末梢の扁平性胸膿は合併しなかった。【考察及び結論】EWSを用いた気管支鏡検査はPS不良例にも低侵襲にて施行可能な治療法であり、かつ侵襲性の高い外科的治療の代替肢として考えるべき治療法であると考える。

6. 保存的治療にて改善した隔離閉鎖の1例

長地尚子（徳島県厚生連徳島中央病院内科）

症例は64歳男性、主訴は発熱、胸痛、既往歴、60歳、糖尿病を指摘されるが放置。2012年4月下旬より咽頭痛が出現するが放置。その後発熱、胸痛も出現し5月上旬近医受診し、胸部異常影捜査を2回1日当科紹介となり入院した。胸部レントゲン写真では、左第1胸外側を認めた。胸部造影CTにて肺吸収異常を認める5～6cmの軟部影と、心辺線は撮影状態に変動し、病変と診断した。隔離隔離および周囲への炎症波及と診断した。MRIでも、肺の高intensityを認めた。

7. 食道鏡歯にて発生した扁平胸気胸に対して胸腔鏡下プラックドレナージを施行した1例

篠田正行、藤原真治（ブトア大学医学部附属病院外科）

症例は26歳男性。発熱、呼吸困難にて発症。EWSで胸部異常陰影を指摘され、胸部CTで扁平胸気胸を発症した。入院経過において扁平胸に対しEWSを施行し、内視鏡下プラックドレナージを施行した。肺前壁の血腫の疑いあり、後日胸腔鏡下プラックドレナージを施行した。術中、肺前の血腫を確認し、同部位にプラックドレナージを挿入した。

8. 保存的治療にて改善した隔離閉鎖の1例

佐藤信行、澤田徹、内崎由伸（高知赤十字病院外科）

症例は50歳男性、主訴は発熱、胸痛、既往歴、50歳、糖尿病を指摘されるが放置。2012年4月下旬より咽頭痛が出現するが放置。その後発熱、胸痛も出現し5月上旬近医受診し、胸部異常影捜査を2回1日当科紹介となり入院した。胸部レントゲン写真では、左第1胸外側を認めた。胸部造影CTにて肺吸収異常を認める5～6cmの軟部影と、心辺線は撮影状態に変動し、病変と診断した。隔離隔離および周囲への炎症波及と診断した。MRIでも、肺の高intensityを認められ


223

日数呼吸器内視鏡学会中国四国支部会